

「現代存在論入門」のためのスケッチ(第二部)

著者名(日)	倉田 剛
雑誌名	教養研究
巻	16
号	2
ページ	123-164
発行年	2009-12
URL	http://id.nii.ac.jp/1265/00000328/

『現代存在論入門』のためのスケッチ(第二部)

倉 田 剛

はじめに

この研究ノートは、現代存在論についての入門書(『現代存在論入門』(仮題))を執筆するという構想のもとに纏められたものである。前回の「第一部」に引き続き、今回の「第二部」においても、「現代存在論についての基本的な話題を、この分野に馴染みのない初学者にも理解できるようなかたちで提供する」という方針に従って、存在論の主要な問題を論じることにした¹。

すでにわれわれは「第一部」(倉田 2009a)のなかで、「存在論とはいかなる学問であるのか」(序論：何が存在するのか)、「存在論的カテゴリーとは何であり、何でないのか」(第一章：存在論的カテゴリーと形式的因子)、「カテゴリーはどのように体系化されるのか」(第二章：二カテゴリー存在論と四カテゴリー存在論)という問いに対してわれわれなりの見解を示した。確信はもてないが、この「第一部」を通じて読者は存在論という学問の輪郭をおおまかに把握できたのではなかろうか。

これから論述する「第二部」の中心的な話題はいわゆる[・][・][・]普遍者の問題である。中世の「普遍論争」を引き合いに出すまでもなく、普遍者の存在およびその本性をめぐる議論は伝統的存在論の核であった。以下でわれわれは、この問題が

1 『現代存在論入門』(仮題)の主な狙いと構成に関しては、次の研究ノートを参照されたい。倉田 剛 (2009a) 「『現代存在論入門』のためのスケッチ (第一部)」, 九州国際大学『教養研究』第16巻第1号, 2009年7月, pp.119-171.

現代においても論じる価値のあるものであり、哲学の歴史のなかで風化してしまうどころか、今日いっそう興味深い仕方で議論されうということを示したい。なお、本研究ノートの第一章は、前研究ノートで予告したとおり、構想全体のうちでは「第三章」の位置を占め、第二章は「第四章」の位置を占めることを断っておく。

第一章 普遍者とは何か

哲学に関心を抱いたことがある者であれば、誰しも一度は「普遍者」(Universals)をめぐる不思議な論争に付き合わされたことがあるに違いない。「不思議な」と述べたのは、論争の内容が「世間一般の人々」から見れば謎めいているという理由からだけではない。よく飽きもせず哲学者たちがこの論争を続けてきたということ、そのこと自体がある意味で「常人」の理解を超えているという意味においても、それは「不思議な」論争なのである。かくも執拗に探究されてきた問題には、いつの時代においても人を惹きつける魅力があるに違いない。だが一方で、普遍者をめぐる論争を「意味のないもの」として切り捨てる態度は「形而上学の復権」が叫ばれている今日でも、広く見受けられることは事実である。形而上学的な問題のほとんどを「擬似問題」として棚上げしてしまう態度、二十世紀の前半に流行したある特定の「哲学的イデオロギー」は、案外と根が深いのかもしれない。われわれは、そうした根強い偏見に抗して、哲学者たちがその存在と本性をめぐる飽くことなく論争を繰り返してきたもの、すなわち普遍者についても一度現代存在論の視点から考え直してみたい。

われわれはすでに「第一部」の序論において普遍者の簡単な規定を行っている。

ノリコ フヘンシャってのは「反復可能なものであり、遍在可能なものであり、

個々のものが共有しうる同一の何か」だったわよね。たとえば、個々の白いチョークとは区別されるような〈白さ〉であったり〈チョーク性〉であったり。

ヨシオ うんうん。〈～は…の上にある〉や〈～は…と2メートル離れている〉といった関係もまた普遍者として記述されていたと思う。だって、そうした関係も様々なもののあいだに反復されうるから。

ノリコ それに、伝統的なカテゴリーのシステムのなかでも、普遍者カテゴリーは重要な位置を占めていたわよね。

タカシ でも、そもそもなぜ普遍者カテゴリーが必要なのかという議論はしていなかったと思う。だからまだ納得が行かないというか。

普遍者を存在のカテゴリーとして認める理由とは何であろう。その存在を認めないと不都合なことでも生じるのであろうか。以下でわれわれは普遍者の存在を擁護する幾つかの代表的な立場を見ていくことにしよう。

1-1 類似性による分類に基礎を与えるものとしての普遍者

最初に検討したい立場は次のように纏めることができる。

A. 普遍者は、類似性にもとづく世界の諸事物の分類に形而上学的な基礎を与える²。

ノリコという黒髪の日本人女学生、イザベルという黒髪のフランス人女教師、メラニーという金髪のドイツ人女学生がいるとしよう。この場合、ノリコとイ

2 Cf., Jubien, M. (1997) *Contemporary Metaphysics*, Oxford: Blackwell, Ch. 3.

ザベルは髪の色が類似しており、同じ「黒髪グループ」に分類することが可能である。また、イザベルとメラニーは出身地域が類似しており、同じ「ヨーロッパ人グループ」に分類することができる。同様に、ノリコとメラニーは社会的身分が類似しており、同じ「学生グループ」に分類することができよう。しかし、いったい何がこうした分類を可能にしているか。もちろん、諸対象のあいだに成り立っていると思われる類似性が分類を可能にしている。だが、類似性(「似ているということ」)はいかにも曖昧な概念であるように思われる。それをもっとすっきりしたかたちで理解することはできないのか。

類似性にもとづくこうした分類は、普遍者の存在を認めるならば、容易に説明がつく。实在論者(普遍の存在を認める論者)たちによれば、これらの類似性は、ノリコとイザベルが〈黒髪性(髪の色)〉という性質(普遍者)を例化していたり、イザベルとメラニーが〈ヨーロッパ人性(ヨーロッパ人である)〉という性質を例化していたり、ノリコとメラニーが〈学生性(学生である)〉という性質を例化していることによって説明される。彼らの考え方に従えば、二つの事物が互いに「似ている」とは、それらの事物がある同じ性質を例化していることである。

ヨシオ そうか。「似た者同士を集める」と言うけれど、それは何らかの同一の性質をもつものを集めてくることに他ならないんだね。

ノリコ 「普遍者は類似性にもとづく分類に形而上学的基礎を与える」というのは大袈裟な言い方に聞こえたけれど、考えてみれば、私たちが日常的に行っている分類は、性質という普遍者の存在を前提するとうまく説明がつくのかもしれない。

もう少しだけこの議論に付き合うことにしよう。引き続き考察したい議論には、先の分類に関する論点に加え、次の論点が含まれている。

B. われわれの日常的な言語使用は普遍者の存在に深くコミットしている。

手始めに先ほどの議論の一部を言語化してみよう。われわれは次のような言い回しを日常的に用いているはずである。

(1) ノリコとイザベルは共通する何かをもっている。

(Noriko and Isabelle have something in common.)

文(1)は、もちろんノリコとイザベルが同一の物理的対象、たとえば同じ自転車[・]を二人で共同所有しているという意味でも解釈できるであろう。しかしながら、(1)はむしろ「ノリコとイザベルには何らかの共通点がある」という意味で解されるほうがより一般的である。この場合、(1)はノリコとイザベルが共有する性質の存在を主張しているように見える。たとえば、〈黒髪である〉という性質、〈女である〉という性質がそうであろう。

タカシ それはどうかなあ。とくに〈黒髪である〉という性質をシェアするなんて勿体ぶった言い方をして、〈黒髪性〉なる普遍者を捏造するのはおかしいと思う。たんに二人は同じ黒髪という物理的対象をもっていると言えぱそれで済むことでしょ。

ノリコ あら、そうかしら。たしかに私たち二人は同じ自転車[・]を共有することはできるけれど、同じ髪[・]を共有することなんてできっこないわ。私の髪は私の頭から生えていて、イザベルの髪は彼女の頭から生えてるんだから！

ヨシオ まあ、同じカツラ[・]を二人で共同所有しているというのなら話は別だけど……。

少々混乱を招いたようである。「同じ」(same)という言葉をここで簡単に説明しておこう。まず、ノリコとイザベルが同じ自転車[・]を共有しているという場合、その自転車は「数的に同一」であると言われる。簡単に言えば、それは二つの数的に区別される自転車ではなく、同じくして一つの自転車[・]である。それに対し、ノリコとイザベルが同じ黒髪[・]をしているという場合、その同じ黒髪[・]は「タイプの同一」であると言われる。そこでは極めて類似しているが数的には二つの区別可能な対象(ノリコの頭髪とイザベルの頭髪)が問題となっており、それらは黒髪タイプ[・]という点[・]で同じであると言われるのである。

ノリコ 「タイプ」って新しい用語がいきなり登場したけれど、それって何なの？

ここでのタイプはわれわれが「普遍者」と呼んできたものに相当する。言ってみれば、普遍者としての性質を「タイプ」という用語で置き換えただけである。〈黒髪タイプ〉自体は数的に同一でありながら、それは多くの事物のうちに反復されうる。つまり、今までの用語を使えば、〈黒髪性〉という普遍者は、ノリコの頭髪やイザベルの頭髪という個別者によって例化されているということになる。これによりノリコの頭髪とイザベルの頭髪は互いに「類似している」(「同じ黒髪である」)と言われるのである。ちなみに、「タイプ」という用語は「トークン」という用語と対で用いられる。トークンというのは、同一のタイプの個々の現れ(個別者)であると考えられている。だから、同一の〈黒髪タイプ〉の個別的な現れであるノリコの頭髪はイザベルの頭髪は、それぞれ「黒髪トークン1」、「黒髪トークン2」ということになるだろう。

1-2 主語述語文の真理と普遍者

次に検討したい立場は次のように纏めることができる。

C. 普遍者は主語述語形式をもつ文の真理を形而上学的に説明する³。

われわれが世界を記述する際に使用する文のほとんどは主語述語形式をもつ。このことは明らかであろう。主語述語文において、主語は世界に存在する何らかの対象を選び出し、述語はその対象を何らかの仕方の特徴づける機能をもつと考えられている。たとえば次の文を考えてみよう。

(1) 石川遼は賢い。(R. Ishikawa is wise.)

この文(1)の主語は「石川遼」である。「石川遼」は、現在日本のゴルフ界で活躍するひとりの若者を選び出す(あるいは指示する)役割を担っている。そして(1)の述語である「(は)賢い」は、主語によって選び出された対象(実在の石川遼)をある仕方の特徴づけている。この説明にはあまり無理がないように思われる。さて、こうした主語述語文が真であるための条件とは何であろう。(いきなり「真」という言葉で登場して戸惑ったかもしれないが、それを「正しい」と言い換えても構わない。ここでは慣例にしたがって、「真」や「偽」という言い回しを用いているだけである。)自然な仕方では考えれば、主語述語文が真であるための条件とは、当の文で言い表わされた事柄が、現に世界の側で成り立っていることである。言い換えれば、ある文の主語で選び出された対象が、その文の述語で表現された性質を実際にもつ(例化する)ときに当の文は真であると言われるのである。したがって、世界を記述する最も基本的な言語形式である主語述語文が真であるためには、主語で指されている対象のみならず、述語が表現している性質、すなわち普遍者もまた存在しなければならないと実在論者たちは主張する。

3 Cf., Künne, W. (1983) *Abstrakte Gegenstände-Semantik und Ontologie*, Suhrkamp; Loux, M.J. (2002) *Metaphysics: A Contemporary Introduction*, London: Routledge.

ヨシオ でもさあ。どうやって「石川遼は賢い」という文が真だってわかるのさ？言い換えれば、どのようにして遼くんが賢いという性質（普遍者）をもつ、あるいは例化しているってことを確かめるの？

それは残念ながらここでの課題ではない。つまり、石川遼くんの IQ を調べたり、彼の脳の仕組みを解明したりすることは存在論者の仕事ではない。そうではなくて、「石川遼は賢い」がどのような条件のもとで真となるのか、そのために世界には何が存在しておかねばならないのか、を問うのが存在論者の仕事なのである。だから、存在論者に「石川遼君は実際に賢いのですか？」と尋ねても、満足のいく答えは到底得られないだろう。そのような問いは心理学者や脳科学者（？）に向けられたほうがよい。存在論者は「石川遼は賢い」が真であるための形而上学的な道具立てのみに関心をもつのである。

1-3 関数（不飽和なもの）として捉えられた普遍

記号論理学の訓練を受けた現代の存在論者たちは、前節で分析したような述語を関数表現として理解する。そして彼らの多くは、伝統的に「普遍者」と呼ばれてきたものは、世界の側でこの関数表現に対応しているものに他ならないと考える。これから見ていくように、主語述語という日常言語の構造は、彼らにとってすでに乗り越えられた分析の枠組みである。しかし押さえておきたい点は、以下で検討する関数論的議論においても言語と世界との対応関係が捨て去られることはないという点である。この意味で以下の議論は前節との連続性をもつに違いない。

ヨシオ いきなり「関数」だなんて。嫌な予感がする。まさか数学の話でも始まるのかな。

「関数」(function)はたしかに数学的な概念ではあるが、数学が苦手な人にも

容易に理解できる概念である。ここでは論理学・哲学における関数論的分析の創始者である G. フレーゲ (1848—1925) のアイディアに依拠して、関数としての普遍者とは何であるのかをごく簡単に見ていくことにしたい。

(1) 北九州は大都市である。

(2) 中村俊輔はサッカー選手である。

文 (1) と (2) は、主語述語構造をもつ完全な文である。これらの文から固有名(「北九州」、「中村俊輔」)を取り去ると次のような空所をもつ不完全な表現が得られる。

(1*) () は大都市である。

(2*) () はサッカー選手である。

(1*) と (2*) は、(1) と (2) の述語に相当する部分であるが、フレーゲの理論においてこれらは「関数表現」(概念語)として捉えられる⁴。なぜかと言えば、(1*) も (2*) も、空所に何らかの表現が挿入されない限りは、完全な意味をもちえない不完全な表現だからである。つまり、「 $f(x)=2x+1$ 」という表現が、それ自体としては未だ値を確定する表現ではなく、「 x 」の位置にたとえば「1」や「2」を入力してはじめて「 $f(1)=2\cdot 1+1$ 」や「 $f(2)=2\cdot 2+1$ 」という値が確定するのと同じだと考えるのである。実際、「は大都市である」を「F」

4 厳密に言えば、概念語は関数表現の一部に過ぎない。概念語は、その値が完全な文であるような関数表現である。それに対し、たとえば「() の首都」という表現は、関数表現であっても概念語ではない。なぜならば、その値は、完全な文ではなく、確定記述句(たとえば「フランスの首都」)だからである。

と記号化し、同様に「はサッカー選手である」を「G」と記号化すれば、(1*)と(2*)は変項(変数)をひとつだけ含む次のような表現として現れる。

(1**) $F(x)$ (x は大都市である)

(2**) $G(x)$ (x はサッカー選手である)

これらの関数表現は、変項 x の位置に固有名を入力すると、完全な文を出力する。たとえば、「福岡」を「a」と記号化し、 $F(x)$ に入力すれば次の文が得られる。

(I) Fa (福岡は大都市である)

すなわち、最初の文(1)は(I)という論理文法的構造を有していたことがわかる。もちろん、x の位置には(ここでは何の制限も設けていないので)あらゆる固有名を入力することができる。「佐賀」=「b」とすると、次の文が得られる。

(III) Fb (佐賀は大都市である)

現実の世界では(I)はおそらく真なる文であるのに対し、(III)は偽であろう。やはり同じように、「松井秀喜」を「b」と記号化し、 $G(x)$ に入力すれば、次のような偽なる文(IV)が得られる。

(IV) Gb (松井秀喜はサッカー選手である)

以上のように、関数表現としての述語は、固有名を入力すれば、真あるいは

偽なる文を出力するものとして捉えられるのである。関数論的な分析の強みはいわゆる「関係」を扱うときに顕著となる。以下の文を見てみよう。

(5) 福岡は佐賀よりも大きい。

もちろんこの文 (5) を次のような関数表現として分析することは可能である。

(5+) () は佐賀よりも大きい。

この (5+) は、先ほど取り上げた $F(x)$ という形式をもつ。すなわちそれは変項をひとつだけもつ関数表現である。しかしながら、もはやわれわれは主語と述語という枠組みに固執する必要はない。(5) に現れる固有名をすべて除去すると次のような表現が得られる。

(5*) () は () よりも大きい。

この (5*) は補うべき空所を二つもつ表現、すなわち、変項を二つもつ関数表現として捉えられる。

(5**) $F(x, y)$

x と y の位置に固有名を入力すれば、(5**) は完全な文を出力する。たとえば、 x =東京、 y =福岡とすると次のような文が得られる。

(6) 東京は福岡よりも大きい。(F(東京, 福岡))

関係を表すこうした多変項の関数表現を抽出することの強みは、以下のよう
な推論の妥当性を証明できることにある。

(α) 東京は福岡よりも大きい。(Fab)

福岡は佐賀よりも大きい。(Fbc)

したがって、東京は佐賀よりも大きい。(Fac)

もちろんこれはFが推移的であること、すなわち「すべての x, y, z につい
て、 Fxy かつ Fyz であれば、 Fxz 」が前提されているが、変項をひとつしかも
たない関数表現しか許容しないのであれば、こうした推移律を用いた推論はそ
もそも成り立たない (β)。

(β) Ga (a :東京、 Gx : x は福岡よりも大きい)

Hb (b :福岡、 Hx : x は佐賀よりも大きい)

したがって、Ha ??

当然ではあるがGaとHbからHaを導き出すことはできない。この意味に
おいて、二変項以上の関数表現はわれわれの推論にとって極めて有用なのであ
る。

ノリコ ちょっと待ってくれないかしら。さっきから聞いてみると、「固有名」
とか「関数表現」(概念語)とか「文」とか「推論」とか、言語の話しか出てき
てないような気がするんだけど。いったいどこで存在論と繋がるわけ？

たしかに論理学の「初歩の初歩」のような話をしてイライラさせたかもしれ
ない。しかし、現代存在論を理解するうえで大前提となるような話だから、ど
うかもう少しだけ辛抱してほしい。次の文(7)は関数論的にどのように分析さ

れるであろう。

(7) 犬は哺乳類である。

ヨシオ これも固有名を取り去って関数表現を作ればいいんじゃない。

タカシ でも (7) には固有名は入っていないと思う。

遅ればせながら「固有名」に関して短く説明しておこう。ここで言う「固有名」は少々特殊である。それはもちろん、一般的な意味での「固有名詞」(「中村俊輔」、「東京タワー」、「隅田川」など)を含むが、その他にも「確定記述句」(「『ノルウェーの森』の著者」や「アメリカ合衆国第35代大統領」など)や「指示代名詞」(「これ」、「それ」など)を含んでいる。要するに、それは世界の個体をただ一つだけ選びだすような表現である。論理学において、こうした表現は「個体定項」(「 a 」、「 b 」など)で置き換えられるのが慣例となっている。たしかに文 (7) にはこの意味における「固有名」は入っていない。フレーゲ流の分析に従えば、(7) は次のような構造をもつ。

(7*) すべての x について、 x は犬であれば、 x は哺乳類である。

つまり (7) は、(2)「中村俊輔はサッカー選手である」といった主語述語文と同じ構造をもつように見えるが、実のところそれらとはまったく異なる構造をもつのである。ここではとくに「 x は犬である」と「 x は哺乳類である」という二つの関数表現(概念語)が現れるという点に注意してほしい。

さて、話を少し前に戻そう。関数表現が出力する文は真であるかまたは偽であるかのいずれかであるが、どうしてそれらは真であったり偽であったりすることができるのであろう。一番もっともらしいのは、われわれが日常的に接し

ているほとんどの文(論理的に真である文を除く)は、世界の状態に応じてその真偽が定まると考えることではなかろうか。

タカシ 「世界の状態に応じて」という考えに従えば、たとえばさっきの文「福岡は大都市である」が真であるのは、世界において固有名「福岡」で指される対象が、関数表現「 x は大都市である」が指す何らかの関数(概念)と実際に結びついている場合だということになるね⁵。

大雑把に言えばそういうことになる。ただ、フレーゲはこの結びつきを「帰属」と呼んでいる。一般に「 a は F である」が真であるのは、対象 a が概念 F のもとに帰属するときである。

ノリコ ジャあ、最後に見た(7)はどのように説明するの？

文(7)では「帰属」とは別の関係が問題になる。フレーゲはそれを「従属」と呼んでいる。一般に「 F は G である」が真であるのは、概念 F が概念 G に従属するときである。(7)「犬は哺乳類である」に即して言えば、「 x は犬である」の対応者である概念〈犬〉が、「 x は哺乳類である」の対応者である概念〈哺乳類〉に従属している場合に、(7)は真であると言われるのである。

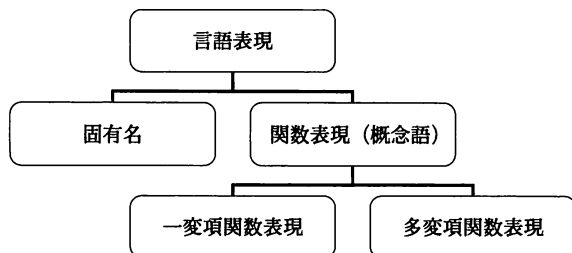
ヨシオ 何となく分かったような気がする。つまり、文の真偽を説明するために、文の部分に対応するようなものの存在を世界の側に認めるということだね。固有名には個体に対応し、関数表現(概念語)には関数(概念)に対応してい

5 ここでも断っておかねばならないが、正確に言えば概念は関数の一部である。「概念とは、その値がつねに一つの真理値であるような関数である」(フレーゲ「関数と概念」[1891], 『フレーゲ著作集4』, 野本和幸訳, 勁草書房, 1999年, 28頁)。先の註4との対応関係に注意する必要がある。

る。そして後者こそ、伝統的に哲学者たちが「普遍者」と呼んできたものの正体である、と。

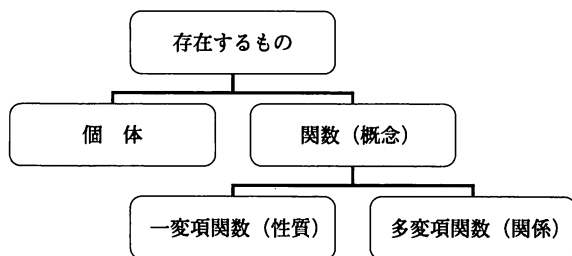
ここまですら簡単に纏めると次のような図として示されるかもしれない。

言語のレベル



言語と世界との対応

世界のレベル



この図は完全なものでなく、あくまで暫定的なものであるが、少なくともそこから言語のレベルと世界のレベルとの対応関係を見て取ることはできると思う。

ノリコ ある意味で明快な図式だけど、概念とか関数っていうのはたんなる集合のことじゃないの？論理学の授業ではそう習ったわ。「中村俊輔はサッカー選手である」という文が真であるのは、「中村俊輔」で指示される個体が、サッカー

選手の集合のメンバーであるときだって。つまり、ここでは「 x はサッカー選手である」という表現は、ある集合を表現するものとして考えられている。同じように、「犬は哺乳類である」という文が真であるのは、犬の集合が哺乳類の集合の部分集合であるときである。ここでも、「 x は犬である」や「 x は哺乳類である」という関数表現は、それぞれ集合に対応している。

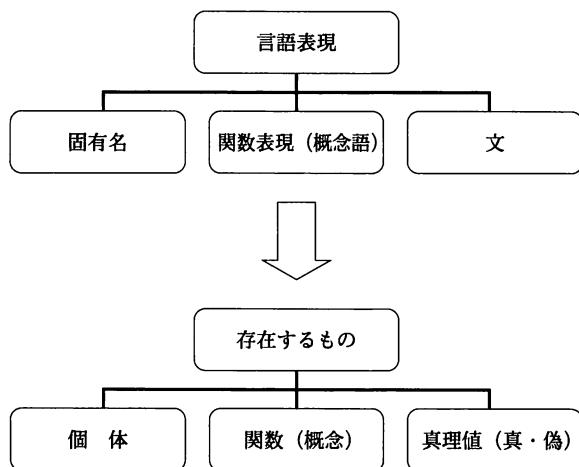
多くの数学者や論理学者は、普遍者といった「訳のわからないもの」を認めたくないためか、結局のところ関数(概念)を集合であるとする。だが、フレーゲ自身は、概念を集合(クラス)とは区別されるものとして捉えていた。彼にとって、集合(クラス)とは、概念の外延ではあっても、概念そのものではない。次章で「クラス唯名論」を論じる際に、この問題を再び取り上げたいと思うが、よく引き合いに出される「共外延」(coextension)の例を使って、概念と集合の違いを少しだけ説明しておこう。いま、「 x は肝臓をもつ」という表現と「 x は腎臓をもつ」という表現に対応する概念はそれぞれ〈肝臓をもつ性〉と〈腎臓をもつ性〉だとする。ここで概念=集合であると仮定する。そうすると、肝臓をもつものの集合のメンバーと腎臓をもつものの集合のメンバーは同一であり、かつ同一のメンバーをもつ二つの集合は同一であるがゆえに、〈肝臓をもつ性〉=〈腎臓をもつ性〉が結論される。しかし、これら二つの概念は異なる構成要素をもつがゆえに互いに区別されるべき概念である。したがって、概念=集合という仮定自体が間違っている。

ノリコ そう言われてみれば納得してしまうかも。さすがに〈肝臓をもつ性〉と〈腎臓をもつ性〉が同じ概念だとは思えないわ。

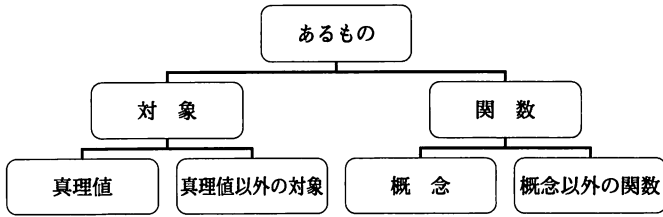
フレーゲの存在論において興味深いのは、彼が個体(フレーゲは「対象」という用語を用いる)を「飽和されている (gesättigt) もの」あるいは「自己完結的な (in sich abgeschlossen) もの」と呼び、関数(概念)を「不飽和な

(ungesättigt) もの」あるいは「 $\dot{\text{補}}\dot{\text{完}}\dot{\text{を}}\dot{\text{必}}\dot{\text{要}}\dot{\text{と}}\dot{\text{す}}\dot{\text{る}}$ (ergänzungsbedürftig) もの」と呼んだことである。つまり、われわれの用語で言えば、フレーゲは「飽和／不飽和」ないし「自己完結的／補完を必要とする」という形式的因子を用いて、個体 (対象) と関数 (概念) という二つの基礎カテゴリーを分類することに成功したと捉えることもできる。むろん、大方の論者はフレーゲの存在論的カテゴリーは純粋に「言語論的」な考察から派生したものだと考えているが。

それはさておき、世界の側で文に対応しているもの、つまり文の $\dot{\text{指}}\dot{\text{示}}\dot{\text{対}}\dot{\text{象}}$ (意味) とは何であろう。フレーゲによればそれは $\dot{\text{真}}\dot{\text{理}}\dot{\text{値}}$ (真と偽) である。この真理値はフレーゲ存在論におけるひとつのカテゴリーであると言えよう。文と真理値を含めた図を提示すると次のようになる。



この図でわれわれは意図的に真理値を「三つの目のカテゴリー」であるかのごとく図示した。しかし実を言えば、フレーゲは、真理値を対象 (われわれの言う「個体」) であると考えていた。(フレーゲ前掲書、30頁)。したがってフレーゲに忠実であれば、真理値は対象 (個体) の下位カテゴリーであると言わなければならない。もしこのフレーゲの見解と、すでに注5で指摘した関数と概念の階層関係を鑑みて図をつくれれば次のようなものになるかもしれない。



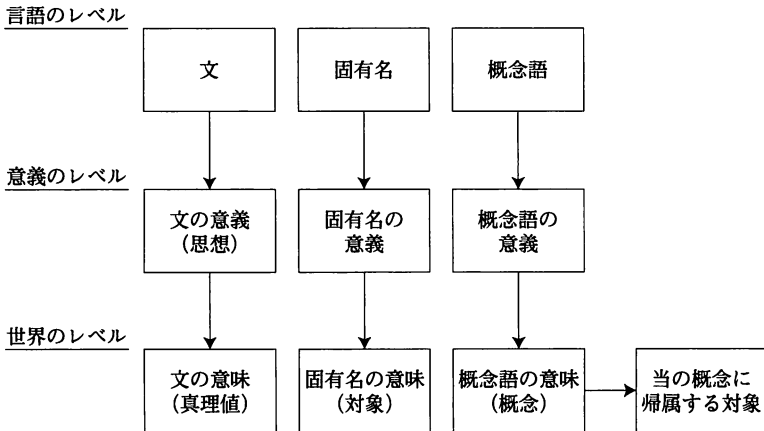
いずれにしても、真理値を存在のカテゴリーに含めるというのは奇妙に思われるかもしれない。だが理論的な整合性からみればそれはまったく妥当な見解である。つまり、言語のレベルにおいて、関数表現に固有名が項として入力されれば、完全な文が出力される。これと同じ構造が世界の側にもある。すなわち、不飽和なものとして捉えられた関数に個体を入力すると、真理値を出力するという構造である。たとえば、 $F(x)$ を $\langle x$ はサッカー選手である \rangle という関数であると解釈し、 x の位置に個体(中村俊輔および松井秀喜)を入力すると次のような結果となるはずである。

$F(\text{中村俊輔}) = \text{真}$

$F(\text{松井秀喜}) = \text{偽}$

これは非常によく練られた理論である。しかしながら、文の指示対象、言い換えれば述語的な関数の値が真理値であるという考え方に疑問を呈する存在論者も少なくない。彼らによれば、それは真理値ではなく事態である。つまり今挙げた例で言えば、文「中村俊輔はサッカー選手である」に世界の側で対応するものは、真理値(真)ではなく、 $\langle \text{中村俊輔がサッカー選手であること} \rangle$ という事態であり、関数にはそうした事態を出力しうるタイプのものがあると言うのである。こうした考え方は、事態をはじめとする「命題の対象」を扱う章において詳しく検討することにした。

最後にフレーゲ自身が同時代の哲学者フッサールに宛てた書簡の中で描いたスケッチをほぼそのままのかたちで示しておこう⁶。フッサールが、フレーゲとともに現代存在論の創始者の一人であることを考えあわせると、このスケッチは極めて興味深いものとして映る。なお、このスケッチではわれわれが論じることのできなかった、言語と世界の間にあるレベル、すなわち意義のレベルを見出すことができる。フレーゲ、そしてフッサールの理論において、言語表現はその意義を介して世界と結びつくと考えられている。



1-4 抽象指示の問題

ノリコ 前々節では、述語の機能というのは、主語によって選び出された対象を何らかの仕方で特徴づけることであって、その述語が普遍者を表現するということが分かったし、前節ではそうした述語が関数表現として理解されて、それに対応する「不飽和なもの」(関数・概念)が普遍者の正体であることは納得できたけれど、普遍者ってそうした述語あるいは関数表現によってしか表現されないものなのかしら。

6 「書簡1 フレーゲからフッサール宛 イエーナ、1891年5月24日」、野家伸也訳、『フレーゲ著作集6』書簡集付〔日記〕、野本和幸編、勁草書房、2002年。

ヨシオ 何かすっきりしないみたいだね。でも、一体どこに問題があるって言うのさ。

ノリコの漠然とした疑問には検討する価値があるかもしれない。以下で、言語使用という観点から普遍の存在を主張する典型的な議論をもう一つだけ検討しておこう。それは「抽象指示」(abstract reference)の問題として知られている。次の文を見てほしい。

- (1) 寛容さは道徳的な美德である。(Generosity is a moral virtue.)
- (2) 丸さは幾何学的な形態である。(Roundness is a geometric shape.)

言うまでもなく、われわれはこうした「抽象語」を主語に立てる言い回しを頻繁に用いている。实在論者によれば、こうした文においても主語述語文の原理、すなわち主語が世界の対象を選び出し、述語がそれを性格づけるという原理は妥当する。たとえば(1)では、主語「寛容さ」が〈寛容さ〉という性質を指し、それに「道徳的な美德である」という特徴づけを行っている。同様に(2)では、主語「丸さ」が〈丸さ〉という性質を指示し、それに「幾何学的な形態である」という特徴づけを行っている。少々難しい用語を使うならば、これらの「寛容さ」や「丸さ」といった語は「抽象単称名辞」(abstract singular term)と呼ばれるが、实在論者たちはこうした抽象単称名辞を主語にもつ文の有意味性と真理を説明するためには、それらが指示する何かが存在している必要があると説くのである。もちろんこの「何か」とは、〈寛容さ〉や〈丸さ〉といった普遍者としての性質のことに他ならない。

ヨシオ 性質をさらに特徴づける、つまりある性質が他の性質をもつというのはごく自然なことだね。

ノリコ うん。それは分かるけれど、フレーゲの理論に触れた前節では別の説明を与えていたような気がするわ。つまり、さっきの(1)や(2)においては、対象が性質(概念)に帰属するという関係ではなく、性質(概念)間の $\dot{\text{属}}\dot{\text{関}}\dot{\text{係}}$ が問題になる、と。

ヨシオ なんで？(1)も(2)も次のような文と同じ構造をしていると思うけどなあ。「～は……である」という構造を。

(3) イイダ先生は寛容である。

(4) 地球は丸い。

タカシ だから論理学を知らない人は困るんだな。(1)・(2)と(3)・(4)の論理形式はまったく異にするってさっき習ったばかりでしょ。たとえば(3)は、個体定項と述語記号で次のように表現される。

(3*) Fa (a : イイダ先生、 $F(x)$: x は寛容である)

もちろん(4)に関しても同様。でも、たとえば次のような文(5)を考えてみると。

(5) ネコは哺乳類である。

この(5)は Fa のような構造をもつ文でなく、条件構造をもつ全称量化文として捉えられる。

(5*) すべての x について、 x はネコであれば、 x は哺乳類である。

($\forall x (Fx \rightarrow Gx)$ 、 Fx : x はネコである、 Gx : x は哺乳類である)

タカシ ここでの「ネコ」は、主語ではなく述語なんだよ。だから、同じように (1) 「寛容さは道徳的美徳である」の「寛容さ」は主語なんかではなく、述語「～は寛容である」として捉えられなくてはならない。というわけで、(1) のようなタイプの文に主語述語構造を見出すというのは間違っているのさ。

本当にそうだろうか。たしかに「論理学を知らない」というのはひとつの欠点ではある。前節で示したように、現代の存在論は19世紀末以降の論理学の成果に大きく依存するという側面をもつ。しかし「論理学を知る」ことによって覆い隠されてしまう問題もあるかもしれない。試しに (1) や (2) をタカシが意図する通り述語論理風書き直してみよう。

(1*) すべての x について、 x は寛容であれば、 x は道徳的美徳である。

(2*) すべての x について、 x は丸いならば、 x は幾何学的形態である。

しかしこれらはもとの (1) と (2) の意味に忠実なパラフレーズとなっているであろうか。たとえば次の二つの推論を比較してみよう。最初の推論 (A) は「ネコは哺乳類である」、「タマちゃんはネコである」という二つの前提から、ある結論を導く推論である。

(A) すべての x について、 x はネコであれば、 x は哺乳類である。

タマちゃんはネコである。

したがって、タマちゃんは哺乳類である。

この (A) は納得がいく推論だろう。だが次の (B) はどうであろうか。これは「寛容さは道徳的美徳である」、「イイダ先生は寛容である」という二つの前提からある結論を導く推論である。

(B) すべての x について、x は寛容であれば、x は道徳的美徳である。

イイダ先生は寛容である。

したがって、イイダ先生は道徳的美徳である。

ヨシオ 「イイダ先生は道徳的美徳である」って結論は奇妙だな。

推論 (B) はどう見てもうまくいってない。このことは (1) 「寛容さは道徳的美徳である」のような文が、述語論理風の全称量化文への書き換えを許さないということを示している ((2) に関しても同様)。肝心なことは、「寛容さ」は述語ではなく、それは何らかの対象を指し示す「名前」として捉えられるということである。われわれがこの議論のはじめに「抽象[・]単称[・]名辞」という難しい用語を導入した意図はここにある。すなわち、「偽装した述語」として解される「一般[・]名辞」(たとえば「ネコ」)とは異なり、「寛容さ」や「丸さ」は、「タマちゃん」や「東京タワー」といった「単称名辞」の一種であることを示唆したかったのである。

ノリコ ということは、普遍者は、述語的な表現(関数表現)以外の表現によっても言い表されるということになるわね。

ヨシオ うーん、なんだか混乱してきたぞ。

ここではもう少しだけ混乱してもらうために、通常の主語述語文における述語を主語の位置にもってくる書き換えに触れておこう。

まず、通常の主語述語文はすべて以下のようにパラフレーズできる。たとえば (X) は (X*) に書き換えることができる。

(X) 石川遼は賢い。

(X*) 石川遼は賢さを例化している。

(R. Ishikawa instantiates wisdom.)

これはすでに検討した例化関係を明示的に言語化したものである。次に、(X*) のような文はすべて (X**) のような文に書き換えることができる。

(X**) 賢さは石川遼によって例化されている。

(Wisdom is instantiated by R. Ishikawa.)

ヨシオ 受動態にするというやり方か。騙されているようだけど、たしかに「賢さ」は主語の位置に移動した。

ノリコ これって一体どういうことなの？明らかに (X**) は「すべての x について、x は賢いならば、x は石川遼によって例化されている」という論理構造はもたないわよね。だって、「ソクラテスは賢い」からといって、「ソクラテスは石川遼によって例化されている」ということにはならないから。

普遍者は述語的表現(関数表現)によってしか言い表せないと考えれば、「賢さ」が指すものは普遍者ではないということになろう。しかし、賢さといった「抽象的なもの」は、東京タワーや石川遼くんといった個別者とは異なるカテゴリーに属するという直観をわれわれはもっている。この違いをどのように記述すればよいのであろう。ひとつの戦略は、「非述語的な普遍者」を認めることであ

る⁷。つまり、先ほどから例に挙げている抽象単称名辞などが指すものを、「述語的な普遍者」から区別するのである。このやり方は、のちに「タイプの対象」を扱うときに本格的に論じたいと思う。この「タイプの対象」に関して一言だけ述べておけば、それは例化されうるものではあっても、述語的なあり方、すなわち不飽和なあり方をしていない対象である。数や命題、音楽作品などはこのカテゴリーに属すると考えられる。

第二章 唯名論への応答

「实在論は普遍者の存在を認める立場であるのに対し、唯名論はそうしたものの存在を否定する立場である」。たしかにこれは实在論と唯名論の規定としては誤っていない。われわれも、今までこうした規定に何度か言及してきた。しかし、ここでもう少し立ち入って両者の違いを考えてみよう。「二つの対象 a と b は同じタイプのものである」と言われるとき、实在論者によればそこでは「厳密な同一性」(strict identity) が問題になっている。言い換えれば、a と b は、厳密に同一の性質(普遍者)を共有していると实在論者は考えるのである。それに対し、唯名論者は、a と b の「ルーズな同一性」、すなわち類似性が問題になっていると考える⁸。a と b は互いに似ているがゆえに、それらは「同じタイプのものである」と言われるのである。实在論者は、同一の普遍者を存在のカテゴリーとして認めるのに対し、唯名論者は、「a と b は同じタイプに属する」

7 「非述語的な普遍者」(Nichtprädicative Universalien) はマイクスナーの用語である。Cf., Meixner, U. (2004) *Einführung in die Ontologie*, Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, Kapitel IV. なお、マイクスナーによればプラトンのアイデアは「タイプの対象」(Typenobjekt)、すなわちこの「非述語的普遍者」として解される必要があるという。Meixner, U. (2004) "Möglichkeit und Wirklichkeit der formalen Ontologie", in *Metaphysik heute-Probleme und Perspektiven der Ontologie*, Freiburg/München: Verlag Karl Alber, p.102.

8 Cf., Armstrong, D.M. (1989) *Universals: An Opinionated Introduction*, Boulder: Westview Press, Ch. 1.

といった分類そのものを否定するわけではないが、普遍者というカテゴリーなしに、それを説明できると主張する。

伝統的に唯名論には様々なヴァージョンがあることが知られている。以下で検討したいのは、現代の代表的な唯名論として知られる「クラス唯名論」、「類似性唯名論」および「述語唯名論」である。

2-1 クラス唯名論

「クラス唯名論」(Class Nominalism)を「集合唯名論」(Set Nominalism)と呼んでもさしつかえないが、ここではアームストロングに従って「集合」の代わりに「クラス」という用語で統一したい⁹。クラス唯名論とは「ものがあるタイプに属するということは、それがあるクラスのメンバーであるということに他ならない」と主張する理論である。つまり、クラス唯名論者にとって「aとbが同じタイプに属する」ということは「aとbが同じクラスのメンバーである」ということであり、それ以上でもそれ以下でもない。

タカシ その考え方はすでにフレーゲにおける帰属関係を論じたときに示唆されていたよね。フレーゲは「aはFである」が真であるのは、aが概念Fに帰属するときだって考えていたけれど、Fはあるクラス(集合)に対応しているから、結局aはFのメンバーだということに帰着するんじゃないかって。まあ、概念Fとその外延としてのクラスを区別しなければならないって言われちゃったけど。

まったくその通りである。それにもかかわらず現代の論者の多くは概念と概念の外延(クラス)を積極的に混同しようとしている。つまりそこには概念という普遍者なしに理論を構築したいという唯名論的な傾向が見出されるのであ

9 集合論における「集合」と「クラス」の違いがここでの問題ではないことを断っておく。

る。こうして「 a は F である」の真理条件は次のように書かれることが共通了解となっている。

「 a は F である」が真である $\Leftrightarrow a$ は集合 F のメンバーである ($a \in F$)

ノリコ 帰属関係にせよ例化関係にせよ、普遍者の存在を前提するから、メンバーシップ関係で置き換えてしまおうというわけね。メンバーシップ関係は、せいぜい個体とクラスぐらいしか必要としないから。

ヨシオ でもクラスって普遍者じゃないの？ 犬のクラスなんて言われたとき、それは目に見えるものではないし、えらく「抽象的なもの」のように聞こえるけれど。

「第一部」の序論でも少し触れたが、クラスをどのカテゴリーに分類するかという問題は非常に難しい。だが、クラスを引き合いに出して、「唯名論者もクラスという普遍者の存在を前提しているではないか」と反論するのはそれほど有効ではない。その最大の理由は、クラスが反復可能なものではないということ存する。犬のクラスは、世界中のすべての犬から成るただひとつの集まりである。犬のクラスの実例とは何かと問うのは、この犬の実例は何かと問うのと同じぐらい奇妙なことである。つまりクラスは例化されうるものではないのである。この意味では、クラスは個別者と同じレベルに属するとも考えられる。こうした反論と比べれば、「クラス唯名論者が前提するメンバーシップ関係自体は普遍者ではないか」という反論のほうが幾分有効であるように思われるが、さしあたり今は問題としないことにする。

繰り返しになるが、クラス唯名論は、「あるものがあるタイプに属する」ということを、普遍者抜きで説明しようとする理論である。クラス唯名論者にとって、 a がタイプ F に属することは、 a がクラス F のメンバーであることに他な

らない。さて、ここで一つの問いを投げかけてみよう。クラス唯名論者はすべてのタイプをクラスによって説明することができるであろうか。

ヨシオ 実在論者たちのなかには、いまだいかなる対象によっても例化されていないような普遍者(タイプ)を認める者もいたよね。たとえば、〈アメリカの女性大統領である〉という性質や〈百メートルを九秒台前半で走る人間である〉といった性質がそうだと思うけれど、こうした普遍者をどうやってクラスによって説明するわけ？

クラスのなかには、メンバーをひとつももたない空クラス(空集合 ϕ)なるものがあるから、さしあたり問題はない。〈アメリカの女性大統領である〉という性質や〈百メートルを九秒台前半で走る人間である〉といった性質は空クラスであるとすればよい。

ノリコ でもそうすると、〈アメリカの女性大統領である〉=〈百メートルを九秒台前半で走る人間である〉になってしまうよね。だって空クラスはひとつしかないのだから。

まったくその通りである。「意味合いを異にする空クラス」なんてものはない。たしかに〈アメリカの女性大統領である〉という性質と〈百メートルを九秒台前半で走る人間である〉という性質が同一だというのはわれわれの直観に反するかもしれない。しかしながら、実在論者のなかにも、実例をもたない性質(例化されていない普遍者)はそもそも存在しないと考える者が多いから、そんなものがどういう扱いを受けようが構わないとクラス唯名論者は開き直ることができる。

タカシ 空クラスを割り当ててやるだけマシだろうってところかな。

ヨシオ 僕は、例化されていない普遍者を認める立場だから、やっぱりこのことはクラス唯名論の大きな欠陥だと思うな。

第一章で触れた「共外延」(coextension)の問題もこの種の困難を指摘したことを思い出してほしい。〈肝臓をもつ〉という性質と〈腎臓をもつ〉という性質の外延は等しい。つまりそれらの外延は同じメンバーから成るクラスである。性質がクラスに他ならないとすれば、当然〈肝臓をもつ〉=〈腎臓をもつ〉になるが、それは許容しがたいというのが実在論者の言い分であった。しかし、こうした反論を、「可能世界」(possible worlds)という理論的枠組みを使ってうまく回避する方法はある。われわれはこの「可能世界」という枠組みを後で主題的に扱うつもりだが「第二部」(今回の範囲には入っていない)、直観的にも十分に理解できる話題であるので、ここでその枠組みを使った再反論を検討しておく。

われわれの生きる現実世界では、肝臓をもつものは、腎臓ももつということが成り立っており、またその逆も成り立っている。しかし、このことは偶然的であるように思われる。もしそうだとすれば、ある可能世界が存在し、そこでは肝臓をもつが腎臓をもたないもの、あるいは腎臓をもつが肝臓をもたないものがあることになる、と可能世界論者は主張する。

ヨシオ ずいぶんと奇妙な生物が住んでいる世界だね、その可能世界とやらは。

可能世界の支持者たちは、一つのクラスに入るメンバーたちの範囲を、現実世界だけでなく、すべての可能世界に拡張しているので、たとえば〈肝臓をもつ〉という性質の外延(クラス)には、肝臓をもつはいるが腎臓をもたないような可能世界の住人たちも入ってくることになる。したがって、肝臓をもつもののクラスと腎臓をもつもののクラスは異なるということになる。これより、クラス唯名論者の言うとおり、性質=クラスだとしても、〈肝臓をもつ性〉=〈腎

臓をもつ性〉にはならないと結論される。

タカシ 可能世界という怪しげなものに目をつぶりさえすれば、非常にクレヴァーな解決策だね。

だが、これによってクラス唯名論における共外延性の問題がすべて解決されたかと言えばそうではない。いま検討した例は「 $\dot{\text{偶}}\dot{\text{然}}\dot{\text{的}}\dot{\text{に}}\dot{\text{共}}\dot{\text{外}}\dot{\text{延}}\dot{\text{的}}\dot{\text{な}}\dot{\text{性}}\dot{\text{質}}$ 」についてのものであった。さしあたり、この例に関してはうまくいったと認めてもよい。しかし「 $\dot{\text{必}}\dot{\text{然}}\dot{\text{的}}\dot{\text{に}}\dot{\text{共}}\dot{\text{外}}\dot{\text{延}}\dot{\text{的}}\dot{\text{な}}\dot{\text{性}}\dot{\text{質}}$ 」についてはどうだろうか。たとえば〈三つの辺をもつ〉という性質と〈三つの角をもつ〉という性質がそうである。これら二つの性質は、等しい外延(すべての三角形から成るクラス)を、たんに偶然的にではなく、必然的にもつように思われる。これがもし正しいとすれば、すべての可能世界において、三つの辺をもつものは三つの角をもつものであり、その逆もまた成り立つということになる。つまり、両性質の外延(クラス)は等しい。したがって、〈三つの辺をもつ性〉=〈三つの角をもつ性〉が帰結されることになる。これより実在論者は、結局のところ性質をクラスに還元することはできないと結論する。

次に検討したいクラス唯名論への反論は次のように定式化される。クラスの同一性は、そのメンバーの同一性である。メンバーを等しくするクラスはすべて同じクラスであり、メンバーが一つでも違えば、それは異なるクラスである。いま「首都のクラス」を考えてみよう。言うまでもなくこのクラスは、すべての首都をメンバーにもつ($\{\text{ワシントン, パリ, ベルリン, 東京, …}\}$)。しかし考えれば明かなように、どの都市が首都であるのかというのはまったく偶然的な事柄である。アメリカ合衆国の首都がワシントンである必然性はなく、それはボストンでもよかったのである。仮にワシントンの代わりにボストンが首都のクラスのメンバーに入っていたとすれば、果たして〈首都性〉なるタイプが異なるものになっていたであらうか。 $\{\dot{\text{ボ}}\dot{\text{ス}}\dot{\text{ト}}\dot{\text{ン}}, \text{パリ, ベルリン, 東京, …}\}$

というクラスは明らかに {ワシントン, パリ, ベルリン, 東京, …} というクラスとは異なる。クラス=タイプ(普遍者)だとすれば、二つの異なる〈首都性〉というタイプ(普遍者)が必要となるが、われわれはそのようには考えないであろう。それを例化する都市が現時点とは多少異なっている、〈首都性〉は変化しないと考える方が自然である。したがって、タイプ(普遍者)はクラスに還元することができない、と実在論者たちは主張する。

タカシ この論証は面白いけれど、不明な点が多すぎると思う。まず首都のクラスのメンバーには、過去に首都だった都市は含まれるのかな？また、未来に首都になるような都市は含まれるのかな？もしそうだとしたら、首都が移転して、新しい都市がメンバーに入ってきてても別のクラスにはならないと思うけれど。

過去に首都であった都市をメンバーに入れるのはそれほど問題ではないが、未来に首都になる可能性のある都市を入れるというのは困難である。原理的には、すべての都市が首都になる可能性をもつからである。また、反実仮想であるが、現在はすでに消滅してしまった都市がもしある国の首都となっていたならば、当然、現在われわれが知っている首都のクラスとは別のクラスができていたであろう。しかしそうしたケースにおいて、果たしてわれわれは現在とは別様の〈首都性〉に関わっているであろうか。やはりそうしたことは考えにくい。ゆえに、クラス=タイプ(普遍者)を主張するクラス唯名論は大きな困難を孕んでいると言える。

この節の最後に考えてみたいのは、「クラス=タイプ(普遍者)」だと仮定してみて、あらゆるクラスにはそれに対応しているようなタイプが見出せるかという問題である。原理的には、どのようなものの集まりでもクラスを形成することができる。ヨシオの飲みかけのジュースが存在し、東京タワーが存在し、冥王星が存在するのであれば、それらをメンバーとするクラス {ヨシオの飲みか

けのジュース、東京タワー、冥王星}が存在する。さて、当然のことながら東京タワーはこのクラスのメンバーである。しかしながら、このことから東京タワーはあるタイプに属していると言うことができるであろうか。

ノリコ でたらめなクラスだわ。たしかに東京タワーが{東京タワー、浅草、お台場、表参道ヒルズ、…}というクラスのメンバーであることは、「東京タワーは東京名所タイプに属する」ことを説明する、というのはまだ理解可能だけれど。何の共通点もないようなメンバーをもつクラスに入っていたからって、あるタイプに属するなんて言えないと思う。

ヨシオ たしかに{僕の飲みかけのジュース、東京タワー、冥王星}というクラスがあるタイプを説明するという説には無理があるね。

以上の論証から実在論者たちは、普遍者と例化関係をクラスとメンバーシップ関係に還元することはできないと説く。この節の前半に論じた論証では、タイプ(普遍者)は「クラス以上の働きをする」点が強調されたが、最後に検討した論証に関しては、「クラスはタイプ以上のものである」と言えなくもない。だがいずれにせよ、普遍者とクラス、例化関係とメンバーシップ関係は別物であるという「まっとう」な反論に対してクラス唯名論者は何らかのかたちで応戦する必要があるだろう。

一番分かりやすいのは、先ほど挙げた「デタラメ」なクラスなどではなく、「自然」なクラスを基礎にしてクラス唯名論を展開することである。しかしながら、彼らが「自然なクラス」と呼ぶ適切なクラスを形成する原理とは何であるのか。ここで再び登場するのが類似性という考え方である。次に検討したいのは、「類似性唯名論」(Resemblance Nominalism)と総称されうる唯名論である。

2-2 類似性唯名論

ノリコ 「自然なクラス」というのは結構だけど、この郵便ポストとこのリングはどうやって同じクラスに分類されるわけ？やっぱり同一の性質（赤性）をもつからじゃないの？

実在論者はそのように考える。しかし、唯名論者は「同一の性質」といった普遍者は認めないのだから、別の説明の仕方を考える必要がある。その鍵となるのが類似性である。

ヨシオ 類似性は「似ている」ってことだね。でも「似ている」ってあまりにも漠然としていて……。

唯名論者たちは類似関係をあまりにも基本的すぎるがゆえに定義できないもの、つまり原始的な関係だと考えている。そして自然なクラスは、メンバー同士のこの類似性によって形成されると主張する。

ノリコ それって反則じゃない？定義できないだなんて。

「反則」と言われれば、そうかもしれないが、実在論者も例化関係をそれ自体は定義できない原始的な関係だと考えているからお互いさまということかもしれない。とりあえず、類似性唯名論者の言い分を検討してみよう。

類似性唯名論者の代表格であるプライスは、すでに現代唯名論の「古典」と見なされている『思惟することと経験』（1953）の第一章「普遍者と類似性」を次のような一節で始めている。

「われわれが周囲の世界を考察するとき、そのうちに数多くの再起（recurrence）あるいは反復（repetition）があることに気づかざるを得ない。同じ色

は何度も何度も繰り返し多くのもののうちに再起する。同様にして形も自らを反復する。また繰り返し、われわれは長方形の形をしたもの、空洞のもの、膨らんだものを目にする。プープー、ドシン、バン、さらさら、は繰り返し生じる」¹⁰。

続いてプライスはものの多くの集まりのうちに「配置の同じパターンまたは様態 (mode)」が繰り返し見出されることを指摘する。例えば「AはBの上にある」(A is above B)、「CはBの上にある」(C is above B) や「一方は他方の内側にある」(one thing inside another)、「一方は他方に先行する」(one preceding another)、「あるものは他の二つのものの間にある」(one thing between two others)、など。

これら「再帰するもの」、「反復する」ものは、プライスの用語に従えば「特性」(characteristic) であり、さらにそれは「質」(quality) と「関係」(relation) に区分される。伝統的に、それらは「普遍者」と呼ばれてきたことをもはや繰り返す必要はないであろう。プライスはこうした特性の存在を認める哲学を「普遍者の哲学」(Philosophy of Universals) とし、自らが依拠する「本源的な類似性の哲学」(Philosophy of Ultimate Resemblance) と対置する。ここでの「本源적 (根本的)」(ultimate) は、「派生的でない」(not derivative) と同義で用いられており、このことはあくまでも類似性をもっとも基本であり、特性(普遍者)はむしろそこから派生するということを意味する。言い換えれば、類似性が特性を定義するのであって決してその逆ではないのである。

だがプライスは、実在論(「普遍者の哲学」)による類似性の分析に対してどのような代替案をもっているのであろうか。いま一度復習しておけば、実在論者にとって、赤いポストと赤いリングが類似しているのは同一の赤さ(普遍者)

10 H.H. Price, H.H. (2008) "Universals and Resemblance" (Ch. 1 of *Thinking and Experience*, 1953) in Van Inwagen, P./Zimmermann, D.M. (eds.) *Metaphysics: The Big Questions*, Second Edition, Oxford: Blackwell, 2008, p.67.

を例化しているからである。つまり、赤いポストと赤いリングは、赤さという点で (in terms of redness) で類似している。この「～という点で」という表現が普遍者の存在を要請することは、たとえば「丸さという点で」、「草食性という点で」といった表現を考えてみれば明らかであろう。しかしプライスは、この「～という点における類似性」を「～への類似性」(resemblance toward～)と読みかえることを提案する。

ヨシオ でも、いったい何への類似性なのさ？

プライスの言葉をそのまま引いておこう。

「何への類似性なのか？ある標準的な対象への、あるいは、私が典型例(exemplars)と呼ぶものへの一つまりある標準的な赤い対象あるいは標準的な丸い対象、などなどへの〔類似性である〕」(Price 2008, 76)。

「典型例」とはあくまでも個別的な対象であって、普遍者ではないことに注意したい¹¹。この見解に従えば、スイカと地球が似ているのは、丸さという同一の性質を例化しているからではなく、双方とも標準的な丸い対象(典型例) —たとえば野球ボールあるいは人間の頭部— に似ているから、ということになるだろう。ここに普遍者は必要ないように思われる。こうした類似性唯名論の主張は次のように定式化することができよう。「 \dot{a} と \dot{b} が同じタイプに属するのは、 \dot{a} と \dot{b} がある典型例 \dot{c} に類似しているときである」。

タカシ こうして普遍者を消去してしまうというのはスマートだね。世界には

11 「典型例」(exemplar)の代わりに「範例・パラダイム」(paradigm)という用語を使う哲学者もいるが、「パラダイム」は他にも様々な意味をもちうるので、われわれはプライスの用語法にしたがうことにしたい。

個別者しか存在しないにもかかわらず、「a と b が同じタイプに属する」という事柄は説明できてしまう。

ノリコ　そしてこの類似性こそ「自然なクラス」を形成する原理だと考える、ということね。コップのクラスは、コップの典型例に類似するものをみな集めてきたものだし、赤いもののクラスは、赤いものの典型例（たとえば熟れたトマト）に類似するものをみな集めてきたものということになる。

ヨシオ　何だか非常に「地に足がついた」理論と言うか……。普遍者を消去したとたんに、熟れたトマトが出てくるんだもんね。

たしかにこの理論はわれわれの認識の仕組みをうまく捉えていると言えよう。子どもたちが世界の諸事物を分類していくプロセスとはまさにこうした構造をもつ。彼らはある身近な事物を出発点にしてそれと似たものを少しずつ集めてくる。子どもに「赤さ」という普遍者が何であるのかを説明してから、赤いもののクラスを作らせるというのは馬鹿げた話である。そうではなく、まず典型的な赤い事物を示したうえで、それと類似したものを集めさせるというのが普通であろう。認知意味論と呼ばれる分野において、われわれはこうした類似性唯名論の影響を見出すことができる。認知意味論では「プロトタイプ」—われわれの「典型例」に相当する—および類似性を用いて「カテゴリー化」という現象を説明しようとする¹²。そこでは抽象的表現を用いた諸事物の分類を説明するために、「普遍者の哲学」は必要とされないのである。

ヴィトゲンシュタインの後期哲学における有名な「家族的類似性」(family resemblances)の議論は、こうした類似性唯名論のひとつの出発点である(『哲学探究』第66節、第67節)。ただし「家族的類似性」は、必ずしも典型例を中心

12 G. レイコフ(1993)『認知意味論』, 池上嘉彦他訳, 紀伊國屋書店, 第1部「カテゴリーと認知モデル」を参照。

とする類似性にこだわらないという点において、プロトタイプ理論よりもラディカルである。『探究』のよく知られた一節を引いておこう。

「たとえばわれわれが「ゲーム」と呼ぶ一連の出来事を考えてみるがよい。私が言いたいのは、ボード・ゲーム、カード・ゲーム、球戯、オリンピック・ゲームなどである。それらすべてに共通するものとは何か。—「共通する何かがあるに違いない、そうでなければそれらは“ゲーム”と呼ばれないだろう」などと言うなかれ。—そうではなく、それらすべてに共通するものがあるのかどうか見てみるがよい。—というのも、君がそれらを見るならば、君はそれらすべてに共通するものなどではなく、様々な類似性、様々な関連性、それらの全系列をそこに見るだろうから」(第66節)。

ボード・ゲームとカード・ゲームのあいだには多くの一致が見られるに違いない。だがボード・ゲームがもつ多くの性質を、カード・ゲームがもたないことも確かである。そこから球戯に移ると、さらに多くの共通点が失われると同時に、また新たな性質が現れてくる。それらすべてには「勝ち負け」という共通点があるのではないか、という反論が出るかもしれない。しかし子どもが壁にボールを当て、自らそれを受けとめるというゲームに関してはどうだろうか。そこに「勝ち負け」があるだろうか。こうしてヴィトゲンシュタインは、「ゲーム」と呼ばれるすべてのものに共通する性質などは見出されないと結論する。見出されるものと言え、重なり合い交差し合う類似性の複雑なネットワークだけである。こうした類似性をヴィトゲンシュタインは「家族的類似性」と名づける。というのも、家族の成員のあいだには、体格、顔立ち、目の色、歩き方、気質などといった様々な類似性が重なり合い交差し合うからである。まさにこの意味で「“ゲーム”はひとつの家族を形成する」(第67節)と言われる。

アームストロングは、この家族的類似性の議論について、ヴィトゲンシュタ

インの言うように「ゲーム性」なる普遍者がたとえないとしても、「重なり合い交差し合う類似性のネットワーク」というものは、実在論においても分析することができる¹³と主張する (cf., Armstrong 1989, 86)。以下の表はそれを示したものである。

個別者	a	b	c	d	e
その性質	FGHJ	GHJK	HJKL	JKLM	KLMN

a と b は GHJ という三つの性質を共有しており、互いに「よく似ている」と言うことができよう。同様に、b と c に関しても HJK という三つの性質を共有している。他方、a と c は HJ という二つの性質しか共有していないので、a と b (b と c) に比べれば、類似性の度合は低い¹⁴がそれでも互いに似ている¹⁵ということができる。しかし、a と e に関してはどうだろうか。それらは何一つ性質を共有していない。それにも関わらず、互いに「重なり合い交差し合うネットワーク」のなかに存在することは確かであろう。これに加えて類似性の推移性を認めるとするならば、「家族的類似性」の理論を¹⁶実在論的に記述することは十分に可能である。アームストロングの分析は、類似性唯名論に対する直接的な反駁にはなっていないものの、少なくともそれが実在論の土台の上に築かれう¹⁷ることを示唆する点で興味深い¹⁸。

2-3 述語唯名論

最後に「述語唯名論」(Predicate Nominalism) と呼ばれる立場を短く考察してこの第二章を終えることにしたい。この理論はある意味で「唯名論」の原義にもっとも近い唯名論かもしれない。

13 アームストロングの実際の分析は、F～Nを、個別者がそれらをもつおかげで述語「ゲームである」が適合するような性質(普遍者)と仮定している点でわれわれの分析とは若干異なることを付言しておく。それに対して、われわれはさらに一步踏み込んで類似性の推移性に言及している。

ヨシオ 「唯名論」の原義って？

タカシ 「唯名論」(nominalism)というのは、読んでのごとく、普遍者ってのはただの名前に過ぎないってことだよ。まあ、名前といってもそれは述語表現のことだけど、中世の哲学者たちは「ポチは犬である」のような文を「ポチ」という名前と「犬」という名前との結合だと考えていたからね。

述語唯名論の立場は次のように簡潔にまとめることができる。

「 \dot{a} がタイプFに属するということは、述語“F”(言語的対象)が \dot{a} に適合する (apply to) ということである」。

ノリコ 述語という言葉的表現が、対象に「適合する」というのはどういうことなのかしら？

この「適合」というのも述語唯名論者にとってはそれ以上分析することのできない原始的な関係である。ただし、われわれはそれを直観的に理解しているはずである。たとえば、「中村俊輔はサッカー選手である」と言われるとき、「サッカー選手である」という述語は、中村俊輔という対象に適合している。それに対し、「野球選手である」という述語は、松井秀喜には適合するが、中村俊輔には適合しない、というように。ここではあくまでも、言語表現と世界の対象との関係が問題となっていることに注意しよう。それは〈サッカー選手性〉なる性質(普遍者)と中村俊輔という個別者との関係(例化関係)とはまったく異なる。つまり述語唯名論者にとって、「 a はFである(a はタイプFに属する)」という文が真であるのは、F性といった普遍者が a によって例化されているからではなく、たんに「F」という述語(言語表現)が a に適合するからだということになる。この「適合」は、「当てはまる」(true of)と表現されることも

ある。

タカシ 普遍者の例化というドロドロとした問題を、ある述語表現がある対象に当てはまるか、当てはまらないかという問題に還元してしまうというのは、かなりスッキリした理論だね。述語唯名論者にしたがえば、結局のところ、実在論者は、たんなる言葉の問題を世界の側に愚直に投影して、普遍者なるものを捏造してしまったということになる。

ノリコ でも、「aはFである」の真理が、たんなる言葉の問題だって言われてもねえ。述語表現がある対象に適合する（当てはまる）かどうかなんて、われわれのいわば慣習（取り決め）の問題でしょ。ある集団では、この述語づけはOKだけど、別の集団ではそれがおかしいと言われることもあるだろうし。

ヨシオ 僕はやっぱり述語がある対象に適合する（当てはまる）ということの基準は客観的じゃないとダメだと思う。何と云えばいいんだろう。それは世界に存在するものに支えられている必要があるというか……。そうしたら、性質（普遍者）はふたたび登場せざるを得なくなる。つまり、aが性質Fを例化しているから、性質Fを表現する述語「F」はaに適合するというように。

以上のやりとりからも推測できるように、述語唯名論にまつわる困難は数多くある。その一つに短く触れてこの節を終えることにしよう。たとえば次のような思考実験を遂行してみる¹⁴。シマウマaは草食動物である。したがって、aは草食タイプに属すると言ってよい。しかし、もしわれわれの言語が「草食である」という述語をもたなかったとすればどうなるであろうか。aは草食動物

14 アームストロングの思考実験を参考にしたが、その内容は多少改変している。Cf., Armstrong, D.M. (1978) *Nominalism and Realism: Universals and Scientific Realism vol.1*, Cambridge: Cambridge University Press, p.17.

ではない、ということになるであろうか。これに同意することはなかなか容易ではない。だが述語唯名論者は、あるものがあるタイプに属するということを、述語の対象への適合性によって説明するのだから、「草食である」という述語なしに、aは草食動物であることを説明することはできない。われわれの多くは、「草食である」という述語が入手可能であろうとなかろうと、シマウマaは草食動物であることに変わりはないと考えるのではなかろうか。そのように考える者にとって、述語唯名論者の主張「述語の適合性がタイプ(性質)を決定する」は誤ったものである。

アームストロングはこうした述語唯名論よりもわれわれが前々節で検討したクラス唯名論のほうが優れていると述べる。なぜならば、クラスは人間がそこにいようがいまいが存在するという意味において「最小限の实在論」を含むからである(Armstrong 1989, 11)。アームストロングの発言は多少ミスリーディングな側面を含むので、ここでわれわれなりに補足しておきたい。ここでの「实在論」とは必ずしも普遍者の存在を主張する理論ではなく、「aはタイプFに属する」ということが人間の心的作用や言語活動から独立していると考えた理論を指すと解さねばならない。そうでなければ、クラス唯名論がある種の实在論であるという奇妙な帰結が生じてしまう。アームストロングは明示的に述べてはいないが、ここでは「实在論 vs. 唯名論」という存在論的論争とは異なるレベルの論争、すなわち「メタ存在論的」な論争(实在論 vs. 構成主義)が問題になっているのである。われわれはこのメタ存在論について後の章であらためて検討することにしたい。

「第二部」の反省点と「第三部」への展望

われわれが第一章の冒頭で指摘した、形而上学への、とりわけ普遍者をめぐる諸問題への根強い偏見を克服しえたのか、そしてそれらの諸問題が今日なお論じるに値する魅力的な主題であることを示しえたのかどうかに関しては、こ

の「第二部」を読まれた読者の判断に委ねるほかない。ただ著者自身の反省点としては、普遍者の存在に関するより細やかな議論ができなかったことを挙げておく。具体的には「否定的普遍者」、「連言的普遍者」、「選言的普遍者」の存在についての立ち入った議論を念頭に置いている。また、第二章「唯名論への応答」のなかで、今日最も有力な唯名論と目される「トロープ理論」を扱うことができなかったことも悔やまれる。しかしながら、最初の構想のなかでも「トロープ」は独立した章のなかで論じることになっていたので、次回の「第三部」の冒頭でさっそうこの主題(「トロープ唯名論」)を取り上げることにしたい。また、本稿第一章のなかで短く触れた「非述語的普遍者」、すなわち「タイプの対象」についても「第三部」のなかで本格的に論じるつもりである。

本稿のスタイルに関しては、前作の「第一部」でも強調したように、明快さと分かりやすさを最優先させた。また、こみいった記述が延々と続くことを避けるために、三人の若い学生による対話文を挿入することを前回と同様に試みたが、こうした折衷様式が果たして成功しているかどうかについても読者の判断を仰ぐことにしたい。